

II 組織の取組

1 過年度の取組

本校では、平成 27 年度土曜授業推進事業の指定を受け、土曜日を年間 10 日開校日とし、教育活動を実施した。本校の伝統として、体育祭や文化祭をはじめとした学校行事への地域住民の参加率が高い。また、地方祭等の地域諸行事においても、本校の生徒がその担い手として参加するなど、地域との関わりが非常に強い。そこで、その計画段階において、教科指導だけでなく、地域活動を取り入れることにした。それまで、本校においては担当課や部活動単位において、それぞれ地域活動に取り組んでおり、学校全体として取り組むような体系的なシステムが確立されていなかった。そのため、週に 1 時間の総合的な学習の時間に、学校全体として地域連携活動に取り組むよう、総合的な学習の時間に取り組む地域活性化事業を「三崎おこし」と名付け、カリキュラムの見直しを行った。1 年生「地域理解学習」、2 年生「地域活性化プランの作成」、3 年生「地域活性化プランの実践」とし、総合的な学習の時間に加え、開校土曜日の 2 時間を使って年次進行で三崎おこしに取り組むこととした。また、研究グループごとに教員を配置することで、生徒・教職員ともに「学校全体で地域協働活動に取り組む」という意識が醸成された。

平成 28 年度には「地域に生き地域とともに歩む高校生育成事業」、平成 29 年度には「コミュニティースクール推進校」、平成 30 年度には「地域を担う心豊かな高校生育成事業地域活性化プロジェクト」の指定を愛媛県教育委員会より受け、地域協働活動の研究に取り組んできた。4 年間の取組を通して、本校卒業生や地域住民、各種団体と連携して活動する機会が増加し、多くの人に本校の取組を知ってもらうとともに、地域との協働による活動への協力体制を確立することができている。

さらに、平成 28 年度より本校は、「伊方町まち・ひと・しごと創生総合戦略」の中核事業として設立された「伊方町移住・定住促進協議会」の構成メンバーとして連携活動を行っている。具体的には、同協議会の会議への参加に加え、同事業の「次世代人材育成事業」として外部講師を招き、「伊方町移住・定住促進協議会」に共催、伊方町、伊方町教育委員会に後援していただいて、学校という枠を越えた町全体でのシンポジウムを開催したり、東京で行われた「特産品フェア」に本校生が帯同し、町の PR を行ったりするなど、地域を担う学校として伊方町と連携して多くの活動に参加してきた。

上記のように、本校がこれまでの 4 年間、地域との協働活動において積み上げてきた経験や、そこから得られた学びは、生徒、教職員と校内全体のそれぞれの立場の間で共有されたと同時に、地域や外部人材との連携を生み出してきた。

2 コンソーシアム

(1) 概要

本事業の実施においては、これまで、それぞれの場面での地域協働活動で育まれた学校と地域の結び付きを軸に、より組織的、継続的な取組を行っていくための組織である「コンソーシアム」を編成することにした。コンソーシアムは地域の人を中心に組織し、様々な立場、視点からの指導・助言を行ってもらうことで、本事業の効果的な実施を行っていくとともに、コンソーシアムメンバー同士の連携を深めることも目的とした。

本年度の活動内容としては、実施事業への指導・助言、来年度実施事業への助言、来年度カリキュラム編成の協議、本事業の運営に関する助言等である。大学や地元 NPO 法人、行政等それぞれの視点から多角的な意見を出してもらうことで、校内の委員会だけでは気が付かない意見や、新たな発想からの助言等をもたらすことができた。

本年度は、7月と2月に2回コンソーシアムを開催した。来年度は第1回目を7月ごろ、第2回目を2月ごろに開催する予定としている。

コンソーシアム参加団体一覧（順不同、敬称略）

機関名	機関の代表者名
愛媛大学	学長 大橋 裕一
NPO 法人佐田岬ツーリズム協会	理事長 宇都宮 圭
NPO 法人さだみさき夢希会	代表 加藤 智明
NPO 法人二名津わが家亭	代表 増田 克仁
伊方町役場	町長 高門 清彦
濱田企画事務所	代表 濱田 竜也
公営塾未咲輝塾	塾長 辻 良隆
愛媛県教育委員会高校教育課	課長 島瀬 省吾
愛媛県立三崎高等学校	校長 川本 昌宏

(2) 第1回コンソーシアム

① 期日 令和2年7月16日（木）

② 参加者

宇都宮 圭氏（佐田岬ツーリズム協会）、田村 義孝氏（さだみさき夢希会）、増田 克仁氏（二名津わが家亭）、山内 清秀氏（伊方町役場）、矢野 重禎主幹、近藤 啓司指導主事、辻 良隆地域協働学習実施支援員、川本 昌宏校長、川野 光正教頭、津田 一幸地域協働課長、河野 雄太地域協働課員、成本 亜衣地域協働課員、山地 範明地域協働課員、

③ 開会行事

（校長挨拶）

学校は教職員だけでなく、地域の方の支えもあってこそ成り立つものであると考える。感染症対策を行いながらではあるが、これまでもいくつかの取組を行ってきた。本日は、本校の取組についてご指導・ご助言をいただきたい。

④ 本事業の概要説明と生徒活動報告

【概要説明】

（津田教諭）

本校の主題設定の理由を説明する。地域課題として、高校卒業後に進学や就職を機に都市部への転出者数が多く、地域の担い手や生徒数が減少している。そこで、高校段階でブーメラン人材の育成や生きる力の育成を行うこととした。育成のための活動として、総合的な学習及び探究の時間や、今年度から開設した学校設定科目である「未咲輝学」を行っている。

今年度は、新型コロナウイルスの影響もあり、地域イベントなどの交流できる活動が減ってしまっているため、ICT機器を活用してオンラインの取組を行っている。この状況をチャンスとして取り組んでいきたい。

総合的な探究の時間では6班に分かれて研究開発している。

昨年度の成果として、「ダルメイン世界マーマレードアワード&フェスティバル」では銀賞や銅賞を得ることができた。今年度は新型コロナウイルスの影響

響で審査はなかった。

県外視察研修では、立命館宇治高校主催の「全国高校生 SR サミット“FOCUS”」に参加し、プレゼン審査会において優秀賞を得た。また、山形県立小国高校主催の「全国高等学校小規模校サミット」に参加し、本校の事例発表を行った。今年度はオンラインでの開催になる可能性がある。

みさこうマルシェでは、昨年度、閉校になった中学校を利用してマルシェを行い、他校生や地元の人などにブースを出展していただき、200名以上の方が来場した。せんたんミーティングでは、昨年度、3回目の実施となり7高校が参加した。高校生が地域の活性化のために活発な話し合いを行った。せんたん劇場は、総合的な学習及び探究の時間の6つの班が協働して一つの大きなイベントを開催し、300名以上の方が来場した。多くの生徒が外部の方と連携し、地域の方からも高校生のおかげで地域が活発になっているとの意見をいただいた。生徒からも、来年度も継続して活動を行いたいという感想を得た。

各教科でも地域に根差した授業を行っている。家庭科では防災関係の調査をしたり、国語や音楽では保育園児との交流を行ったりすることで、地域に出て活動している。

未咲輝学は、SDGs を核として研究する学校設定科目である。これまでの活動を振り返ると SDGs の概念が地域のブーメラン人材の育成につながると期待できる。さらに、教員の異動や活発に活動していた生徒の卒業などから活動が後退しないようにするため、体系的に学習できる科目として設定した。1年生は地域理解、2年生は地域課題、3年生は地域人材育成をテーマとしている。このうち、2年生は RESAS を用いて、データとして地域の実態を見て、地域課題の発見・解決策を模索する活動となっている。第1回は全校生徒へ SDGs の説明を行った。1年生に関しては SDGs の項目のうち、「14 海の豊かさを守ろう」に興味を持つ生徒が多く、漂着ゴミの問題から、ブイアートへとつなげていきたいと考えている。

(河野教諭)

#allwecando として、新型コロナウイルス感染症対策のための動画を発信した。また、6月6日に親子オンライン体験フェスに参加し、首都圏30名の小学生を対象に zoom 上で生徒が授業を行った。

(川野教頭)

今年度は新型コロナウイルスの影響で、できないことが多くあった。しかし、副産物として動画配信など新しい活動を行っている。また、昨年度と比較して、入学者数が増加した。

⑤ 研究協議

- ・地域との協働活動をさらに進めていくための情報発信の方法について検討
- ・生徒の主体的な活動と教職員の関わり方について

⑥ 質疑応答

(田村氏)

SNS 発信なども素晴らしい。一方、教員や生徒の負担は大丈夫かという心配がある。また、SNS の予算措置などを行っているのか。

(河野教諭)

今年度は、有志の生徒が SNS 発信の資料の編集を行っているため、教員の負担は軽い。2月の「みさこうチャンネルプロジェクト」などでも動画制作を

行うが、このような SNS 発信は重要であると考えてる。

(川野教頭)

加えて、Wi-Fi の設置やタブレットの設置などの環境整備も行われていて、さらに、生徒数も増えたため、負担は減少している。

(田村氏)

インフラ面での要望はあるのか。

(川野教頭)

特にない。寮など Wi-Fi 整備などの環境不足はあるが、少しずつ整備が進んでいる。

(川本校長)

塾との連携も行っており、マンパワーは素晴らしいものである。

(宇都宮氏)

防潮堤の壁画の件だが、施設使用許可取りは県に、ペンキ代は町に連絡すると良い。進み具合はどの程度か。

(山地教諭)

情報に感謝する。現在、アート班は生徒が意見を出し、主体となって動いているため、進みが遅いことをご理解いただきたい。

(宇都宮氏)

少し進度が遅いように思うため、早急に許可取りを行っておくと良い。

(山内氏)

まちづくり団体の町民の意見を 2 点伝える。

高校生が地域づくりに関わりすぎではないかという意見が出た。学生の本分は学業であるため、学業を優先すべきではないか。

第三者が関わっていないという意見が出た。生徒が主体となって行う活動と、受動的になる活動の二つがある。

(津田教諭)

現在はほとんどの生徒が意欲的に取り組むようになっており、意欲的な生徒とそうでない生徒の差が少なくなったため、今後は、こちらが手を掛けることもより少なくなると思う。

(増田氏)

地域にもっと踏み込んでいただきたい。また、受動的にやらせることも大切であると考えてる。

(田村氏)

生徒が主体的に行うことも大切だが、授業外で行うことにも疑問を持つ。

(川野教頭)

地域魅力化活動が学業の一環である。また、教員が主導して行うことで、生徒が動くことができることも大切であると思う。

(川本校長)

普通科の中でも魅力ある活動として、地域魅力化活動を行っている。

(津田教諭)

1 年生に県外生が多くいるが、県外生が興味を持って活動を行っている。この姿を見て、県内生なども動いてくれることを期待する。

(田村氏)

三崎おこしを通じて、どのような成果が出ているのか気になっていた。三崎高校でこのような形で成果が現れているのがよかった。三崎高校ならではのカリキュラム作り、体系作りをしなければならないと感じた。

⑦ 閉会行事

(校長挨拶)

熱心にご協議いただきありがたい。本日いただいた貴重なご意見は、本校で練り上げ、今後の活動に生かしていきたい。

(3) 第2回コンソーシアム

① 期日 令和3年2月16日(火)

② 参加者

笠松 浩樹氏(愛媛大学)、宇都宮 圭氏(佐田岬ツーリズム協会)、
増田 克仁氏(二名津わが家亭)、山内 清秀氏(伊方町役場)、
矢野 重禎主幹、近藤 啓司指導主事、
辻 良隆地域協働学習実施支援員、
川本 昌宏校長、川野 光正教頭、津田 一幸地域協働課長、
河野 雄太地域協働課員、成本 亜衣地域協働課員、
(アドバイザー) 浦崎 太郎氏(大正大学)

③ 開会行事

(校長挨拶)

今年度は、コロナの影響による行事中止の下でも視察、オンライン活動を行うことができた。これらを来年度にも生かしたい。学校の試行錯誤が地域の魅力づくりにつながる。

④ 本事業の概要説明と生徒活動報告

【概要説明】

(津田教諭)

「みさこう・せんたんプロジェクト」として、情報発信・地域おこしイベントの企画運営・商品開発・せんたん部などグループに分かれて活動している。各班の発表を本日午後より体育館にて行う予定である。3年生尾澤は、EGF キャンパスアワードにおいて優秀賞をいただいた。前回の反省から、生徒主体の取り組みを意識した。限られた中での活動だったが、昨年度よりも充実した活動を行うことができた。

⑤ 来年度事業について

(津田教諭)

本事業は3年目、まとめの年である。事業の完成を目指す。また、今年度より未咲輝学の授業も始まり、地域理解をより深めていきたい。外部講師を伊方町と八幡浜市から招き、起業家育成にも取り組んでいく。

⑥ 研究協議

(笠松氏)

入学者が増えた背景と来年度入学生の数を知りたい。

(川本校長)

地域みらい留学等でアピールして、賛同されたと感じる。特にブイアートなどの活動。県内の中学校にも回って三崎高校のアピールを続けたことで入学者

が増加した。今年度の学校見学者数でいえば、今年度の入学者数と同じくらいだった。入学者は今年と同じくらいの可能性があると考えられる。

(増田氏)

新聞記事にもあるが、店のシャッターに絵を描いてもらった。少しでも地域の方に元気になってもらいたいと思い、お願いしていた事業を実現させていただき感謝している。来た生徒はみんな県外生で、話していたら元気になった。田舎にはない感性を持っていて、地元の生徒や地域の人とうまくやっているのかなと心配になった。

(川本校長)

活動の中で、地域の方に心を開いて本音を話せたのかなと思う。寮生活はしっかりできている。県外の子と地域の方とが一緒になって行く、このような活動を増やしたい。親元を離れて生活しているので、心細くなってしまう場面もある。地域の方との触れ合いが課題だと感じる。

(増田氏)

地域を盛り上げてくれて嬉しい。できる限り力になりたいので、学校から地域にもっと踏み込んでくれたらよい。

(川野教頭)

県外生でも様々な子がいる。地元生、県内生、県外生などあまり区別はないように感じる。都会から来た生徒には人と人との触れ合いを感じてほしい。寮の仲間意識は強くなっているかもしれないが、地元生ともお互い刺激になっている。

(笠松氏)

活動の動機付けはどのように行っているのか。

(河野教諭)

生徒の、地元を応援したいという気持ちからオンラインフェスなどの活動は行った。ただ、外部の方とつなぐ場合はこちらから提供しているところもある。

(笠松氏)

教員の情報提供力も高いのでは。

(川野教頭)

三崎高校の得意としているところ。教員からヒントを出すときもあるが、今年度は出さなくても力は育ってきていると感じる。自分たちでやる意識が身に付いてきた。

(津田教諭)

1年生は人数も多く、様々な場所から集まってきているため、興味の幅も広い。現在、研究グループを縦割りで行っている。来年度も卒業生を上回る入学者が予想されている。現在の6班で興味が合致しにくいのではないかと危惧している。より個人の興味にマッチした研究テーマにしていきたいと考えている。地域の方にも助けていただいているが、より一層地域の手を借りていく必要があるのではないかと。アドバイス等あれば教えていただきたい。

(宇都宮氏)

これまで、様々なところで関わらせていただいた。防災、ブイアート、カフェなど。学校内だけではできない活動なのは理解しているが、受け入れる側としても限界がある。せんたん部おとな組のように、行政などに協力してもらい、

地域人材と学校の間に関係性を導入してみよう。さらに、カフェ活動を他の店に声をかけるなどすれば、取組が広がっていくと思う。防災に関しても、地元ともっと協議すべきである。今後、三崎高校を応援したいという人を募集していくのはどうか。

(津田教諭)

コンソーシアムの持続発展のためにもそのような仕組みを作りたい。

(宇都宮氏)

伊方町役場にも関わってもらうことが必至。行政として、空いている公共施設を無償で貸してくれるなど、負担がかからない範囲で行ってほしい。

(山内氏)

公共施設の利用について、旧三崎保育所を使いたいと希望を聞いている。老人クラブも使いたいということなので協議しなければいけない。現段階で止まっているのは、耐震が心配なため。安全を考慮し、時間はかかるかもしれないが、前向きに検討したい。

(辻氏)

総合で関わっている生徒と、旧三崎保育所の建物の平面図を広げて考えている。

(浦崎氏)

三崎高校は生徒と地域の方との関係性が成熟している。次のステップにチャレンジしてほしい。島根県立吉賀高校で、生徒1人に対して、教師や地域の方などの大人が話をする機会を設け、生徒がどんなことに興味があり、どんなことをしたいか聞き、そのためにどんな学びをしていくべきかを模索している事例がある。学校のグランドデザイン会議だったが、生徒は「進路相談会は楽しかった」と感想を書いていた。土台ができていたのでぜひチャレンジしていただきたい。

⑦ 閉会行事

(校長挨拶)

やればれるほど新しい発見があるものと感じている。今後ともよろしく願いいたします。本日は誠にありがとうございました。

3 管理機関及びコンソーシアムにおける主体的な取組について

(1) 職員体制に関する支援

- ① 小規模校で地域活性化活動に取り組むことを希望する優秀な教員の配置
- ② 本校出身の優秀な教職員の配置や、本校勤務年数が長い経験豊富な教員の配置

(2) 取組内容に関する支援

- ① 生徒のグローバルな視点の習得支援(未咲輝塾によるトビタテ！留学 JAPAN 応募にいたる指導)
- ② 生徒のコミュニケーション能力の向上支援(県教育委員会によるえひめスーパーハイスクールコンソーシアム in 南予の参加支援)
- ③ 伊方町による本校地域活性化に関する特別授業における講師謝礼、旅費の令達
- ④ 伊方町による本校地域連携事業(せんたん新聞制作)新聞制作費用全額補助

- ⑤ NPO 法人佐田岬ツーリズム協会によるブイアートプロジェクト（地域資源活用プログラム）における活動支援
 - ⑥ NPO 法人佐田岬ツーリズム協会によるオンラインイベント（地域資源活用プログラム）における活動支援
 - ⑦ NPO 法人さだみさき夢希会によるみっちゃん大福の普及及び販売活動（特産品の開発）における活動支援
- (3) 成果普及のための支援
- ① えひめスーパーハイスクールコンソーシアム in 南予の開催（1月29日、発表と意見交換）発表校
 - ② 「えひめ地域づくりアワード・ユース 2020」（県教育委員会等後援）への参加支援
- (4) 運営に関する支援
- ① 運営指導委員会の開催
年2回実施（7月16日、2月16日）
 - ② コンソーシアムの開催
年2回実施（7月16日、2月16日）
 - ③ えひめスーパーハイスクールコンソーシアム in 南予の開催（発表と意見交換）
1月29日実施

4 伊方町（伊方町移住・定住促進協議会）との連携について せんたん新聞の作成（予定）

本年度は、新型コロナウイルス感染症の拡大の影響により、年度当初に予定していた「第4回せんたんミーティング」、「第2回せんたん劇場」の開催及び、外部の専門家を講師とする特別授業の実施等の連携事業がすべて中止となってしまった。その中で、11月に、伊方町総合計画（後期基本計画）における「次世代につなげるまちづくり みらいづくりワークショップ」に参加した、本校から参加した9名の生徒は、町内の中学生や役場職員、地域住民等と1日かけてワークショップを行い、伊方町の望ましい将来像について話し合った。本校の参加生徒の中には、県外出身者も多く、フィールドワークを行ったり様々な立場の人と話したりすることで、伊方町についての理解を深めるきっかけとなった。

5 集落等コミュニティに特化した課題解決カリキュラムの開発

(1) 類型毎の趣旨に応じた取組について

地域魅力化型の趣旨を踏まえ、学校と地域が協働することで互いの強みを生かしつつ、さらなる相乗効果を生むことをねらいに活動に取り組んだ。学校の強みとしては、高校生らしい柔軟な発想力を生かした活動を行っていくことや、地域の行事や伝統文化の後継者としてこれらの活動に活力を与えられることである。一方、地域の強みとしては、学校内だけでは実践することのできない探究的な学習活動の場を提供できることや、多様な人との関わりを通して、コミュニケーション能力などの「生きる力」を育むことができるということである。本校は、愛媛県内で高齢化率が2番目に高い伊方町に立地しており、地域課題が生徒一

人一人にとって身近なところにある「地域課題先端地域」である。しかし、それを否定的にとらえるのではなく、「最先端の学びができる地域である」と肯定的に捉えることで、生徒一人一人が明るい展望を持ちながら課題解決学習に取り組むことができている。また、地域住民との距離が近く、本校への関心が高く期待も大きいいため、協働的で開かれた活動を行うことができている。

(2) 学校設定科目「未咲輝学」について

本年度より、系統的かつ、持続的な地域協働活動の取組を行っていくために、学校設定科目「未咲輝学」を開講した。週に1時間、学年ごとにテーマを決めて学習活動を行い、3年間の系統的な授業を通してブーメラン人材として必要な力を育成することを目標として学校設定科目を設置した。また、学校設定科目を新設することでカリキュラムを再編し、効果的な学習活動を行うとともに生徒・教職員の負担を軽減することも目的としている。

1年生は、「地域理解」をテーマに、地域の史跡見学や調査・研究等の活動を行った。地域の郷土館の学芸員や地元企業の人に協力してもらい、専門的な助言をしてもらうことで、より深く地域理解を行うことができた。

2年生は、「地域課題の発見・解決」をテーマに活動を行った。地域課題を経済的側面から考察するために、経済産業省と内閣官房（まち・ひと・しごと創生本部事務局）が提供しているRESAS（地域経済分析システム）を用いてグループごとにテーマを設定して、研究を進めた。その研究結果を「地方創生☆政策アイデアコンテスト」に応募することで、第三者による客観的評価を得、自分たちの活動の見直し、改善を図る機会とした。

3年生は、地域資源を素材として一人一つビジネスプランを作成した。その中で優れたプランをブラッシュアップし、「EGFキャンパスアワード2020-2021」に応募し優秀賞を獲得した。令和3年1月から起業家育成担当のカリキュラム開発専門家を雇用したため、来年度はさらにカリキュラムを工夫し、1、2年次の活動の集大成とするとともに、経済活動の観点を取り入れた探究活動を行っていくことで、起業家育成の基礎としたい。

地域の特色を生かした商品づくり、販売を行うことで、地域の魅力を発見し、地域の新たな雇用の場としてブーメラン人材の地域へのUターンを促すとともに、地域経済を支えることのできる起業家の育成を目指して学校設定科目の研究に取り組んでいきたい。

6 校内体制

(1) 地域との協働による探究的な学びを実現するためのカリキュラム・マネジメントの推進体制

校内の教育課程委員会において、各教科等における取組内容や、実施時間の原案を年度当初に作成した。その原案を基に、カリキュラム再編のための校内検討会議を開き、実際の運用や実施状況についての情報共有を図った。また、コンソーシアムや運営指導委員会においても、実施状況等を報告し、適宜、指導・助言を受けた。

(2) 学校全体の研究開発体制について（教師の役割、それを支援する体制について）

地域協働課を中心として、本校がこれまでに築き上げてきた実施体制の下、研究を行った。具体的には、総合的な学習及び探究の時間においては、研究テーマごとに生徒を縦割りにした班を作り、複数名の担当教員を配置した。教員の役割としては、生徒の活動における助言や、外部人材との連絡、調整等が挙げられる。未咲輝学では、各学年団の教職員が年度当初に提示されたカリキュラムを基に、具体的活動内容を決定した。地域協働課員は、各研究班に必要な外部人材の紹介、調整を行ったり、班ごとの連携を図ったりするなどして担当教員のサポートを行った。また、各探究活動における担当教員や代表生徒が定期的に進捗状況等を話し合う場を設定することで、各班がスムーズな情報交換を行い、それぞれ連携したり、サポートし合ったりしやすい環境作りを行った。さらに、カリキュラム開発等専門家から助言や提案、外部人材の紹介をしてもらうことにより、より深まりのある取組を行うことができた。

(3) 学校長の下で、研究開発の進捗管理を行い、定期的な確認や成果の検証・評価等を通じ、計画・方法を改善していく仕組みについて

総合的な学習及び探究の時間においては、各研究班担当教職員が、未咲輝学においては、各学年団の教職員と地域協働課員が定期的意見交換をし、進捗状況が分かるようにしている。成果の検証については、年度当初と年度末に生徒対象に実施したルーブリックの分析や、生徒のレポート、成果発表会などから総合的に判断した。また、高校魅力化評価システムの結果を基に、生徒や学習活動の状況を分析している。年度末には、地域協働活動成果検証会を行い、本年度の成果の検証と次年度の改善点を話し合う機会とする。